

## 8月分ジャーナル

一度滞在した所に再びやって来ると、どうしてこうも懐かしい気持ちになるんだろう。

1ヶ月半で滞在を切り上げて帰国し、またここに帰って来た。

日本で仕事をしていた間は作品の制作は少ししか進められなかった。6ヶ月前、コラボレーションのはじめに感じた高揚は落ち着き、今はスタジオに留まって作品の制作に専念することへの幸せを嘔み締めている。スタジオの向こうの端で制作しているマキシーンさんが、わたしが今ここにいて制作をしていることを歓迎してくれていることが嬉しい。今、スタジオには学生はいない。夏休みだから、わたしたちが制作場所を占領している。広い場所、大きい机、ベニーナ(BERNINA)のミシン、そしてBBCのラジオ放送がずっと流れている、わたしにとっては願ってもいない空間だ。十分な広さのスタジオで制作するのは、学生の時以来久しぶりのことだ。

マキシーンさんとわたしのコラボレーション作品のために、わたしは衣服とポケットが内包している空間の「境界」をテーマにした部分を制作している。衣服は、着ている人の公に見せている面と極めて個人的な内面とを隔てる境界である。わたしは思う。世界中で着られている衣服の中でも、ジーンズほど広い地域で様々な背景を持った人々に着られているものはないだろう。身体をおおう境界としての機能も持っているジーンズは、その点で国や文化、年齢や性別の境界を越えた存在であるとも思う。

ジーンズには通常5つポケットがついている。これは多くのズボン、例えばチノパンなどと比べても、少なくとも1つは多い。女性用の洋服の中にはポケットがないのものも多い中、これは驚くべき数字である。労働着出身のジーンズは、手の近くに多くのポケットを持つことで、働く人の持っている物の（または手自体の）落ち着き先を提供している。

現在、ジーンズからパターンを起こして、薄くて張りがあるコットンオーガージーで半透明のジーンズをつくっている。ジーンズはわたしの周辺にいる人やこのプロジェクトに参加することで知り合った方々から借りてきたものを使用している。どのジーンズもひとつひとつ全く違う。シルエット、サイズ、縫製、タグやポケットのステッチが違うのはもちろんのこと、長年の使用で擦り切れた穴なども加わって、着ていた人の存在を雄弁に語っている。

出来上がったコットンオーガージー製のジーンズを見て、マキシーンさんが「ジーンズのghost(幽霊または影) みたいにみえる。」と言った。なるほど、確かにそんな感じだ。もともなったジーンズの物語を、ポケットや穴に関する部分を強めてわたしに語りかけてくる。また、マキシーンさんが制作を担当する部分と連結する長い筒は、「昔、煙突掃除屋さんが持って来た、ねじ込んでつなげるチューブに似ている。」そうだ。わたしも一度そのチューブを見てみたいものだ。幅8cmの細いコットンオーガージー製のチューブは、一度縫い合わせ

るとアイロンをかけることは難しくなる。連結するため、そして筒に張りをもたせるために、端にマジックテープを縫い付けている。

先日、ディレクターのレスリーさんご夫妻が、カタログ撮影の写真家と展示プランを考える建築家と共にスタジオにやって来られた。撮影のためにジーンズのゴーストを吊り下げてみると、展示に関する具体的な計画が見えて来た。残りの限られた滞在で、作品を完成させなければ。

新田恭子